

教育者の「子ども観」に関する研究

—教師・保育者を中心に—

住田正樹^{*1}・中村真弓^{*2}・山瀬範子^{*3}

A Study of the view of childhood: focusing on teachers in education and early childhood care

Masaki SUMIDA, Mayumi NAKAMURA & Noriko YAMASE

ABSTRACT

This study aims to examine the view of childhood which teachers in education and early childhood care have. The view of childhood is the image and sense of value for children. Many criminal cases of children get a lot of attention from the mass media. It leads to the transition of the view of childhood. This transition also makes confuse about children.

This paper describes the view of childhood of teachers. Teachers in education and early childhood care have special knowledge about children. What influence is this knowledge on the transition of their view of childhood?

We analyzed the date of questionnaire method which put into practice at Fukuoka in 2003. The result clarified the following points ;

- (1) Teachers have more positive view of childhood than the others.
- (2) In community, teachers have closer relationship with children than the others have.

Thus to learn the special knowledge about children make fine transition of the view of childhood.

要 旨

本稿は、教師・保育者といった教育者のもつ子ども観を明らかにすることを目的とする。子ども観とは、人々が「子ども」に対して付与するイメージや価値観をさす。今日、子どもをめぐる様々な事件についての報道がマスコミを賑わせているが、その根幹にあるのは、「子どもがわからない」という子ども観の揺らぎである。この子ども観の揺らぎは、「子どもに対する接し方がわからない」という子どもに対する行動の揺らぎにも関連していく。

本稿では、特に、教師・保育者の子ども観に着目する。教師・保育者は子どもに関する専門的知識を持っているという点で、一般の大人とは決定的に異なる。この専門的知識を持っているということが、子ども観の変容にどのような影響を持つのだろうか。近年、親に対しての子育てに関する教育の実施について議論がなされているが、親に子どもに関する専門知を修得させること、つまり、子どもに関する専門知識を持っているということが、その価値観と行動にどのような影響を与えるかをみる上でも、本稿は一定の意義を持つといえるだろう。

2003年に福岡県で実施した調査から、①教師・保育者の方が子どもに対して肯定的な捉え方をしていること、②教師・保育者では、地域においても、子どもへの働きかけが積極的であり、子どもの育成団体活動あるいは子ども行事への参加が高いことがわかった。このことから、子育ての当事者である親に対する教育のみならず、子育て世代を取り巻く人々にも、子どもに関して学ぶ機会を与えることは、子どもに対する見方を形成し、子どもとの相互作用に変化をもたらし、ひいては子どもの行動・発達につながっていく可能性が指摘できる。

*1 放送大学教授（「発達と教育」専攻）

*2 尚綱大学短期大学部講師

*3 四国大学短期大学部助教

I. 問題とアプローチ

本稿は、教師・保育者といった教育者のもつ子ども観を明らかにすることを目的とする。子ども観とは、人々が「子ども」に対して付与するイメージや価値観をさす。住田（2004、2006）は、子ども観の内容を分析することによって、子どもに対する人々の働きかけの動機や相互作用状況、子どもに対する信念や価値感情、その社会や集団における子どもの社会的位置や発達の方向性を理解することができるとしている。このように、私たちは、子ども観を基に子どもたちを捉え判断し、子どもたちに対してどのような行動をとるかを決定していく。

今日、児童虐待や子どもに対する残酷な犯罪、少年犯罪など、子どもをめぐる様々な事件についての報道がマスコミを賑わせている。これらの報道は、子どもに対する大人の不可解な行動（例えば、児童虐待や子どもに対する犯罪）と子どもたちの（大人からみて）不可解な行動（例えば、少年犯罪やマナーの問題など）のふたつの方向に類別できるが、いずれにせよ、その根幹にあるのは、「子どもがわからない」という子ども観の揺らぎである。柏木（2001）は、子どもの価値は普遍・絶対的なものではなく、社会経済状況と密接関連していると述べたが、この子ども観の揺らぎは、「子どもに対する接し方がわからない」という子どもに対する行動の揺らぎにもまた関連していく。子どもがわからない、だから、子どもにどう接すればよいかわからないのだ。

このような社会的状況を受けて、本稿では、特に、教師・保育者の子ども観に着目する。どのような子ども観をもつかによって、その人の行う教育・保育の方向性が決まるため、教師・保育者にとって、職務を遂行する上で、子ども観は特に重要な価値観のひとつとなる。柴野（1989）は、教師であることと教師になることは同じではなく、実習生は対応の仕方に戸惑うが、やがて教師という職業的役割を取るなかで、教師自身が次第に社会化され、子どもが見えてくることを指摘している。また、青年期の女子学生と幼稚園児を持つ母親の子どもに対するイメージを比較した岡野（2003）の研究によると、学生が子どもの一端のみを捉える傾向が強いのにに対して、母親たちは、多様な子どもイメージを抱いており、子どもの持つさまざまな側面について複眼的に捉えていた。

つまり、教師・保育者は、その養成過程において、専門的知識・技能の習得や実習での経験を通して、自身の子どもの観を確立していくのである。加えて、この子ども観は、職場で、実際に、子どもたちと接することによって変化していく。日常的な子どもとの接触により実際の子どもの姿を見ることや、周囲の教師・保育者と関わることにより、子ども観が変化していくのである。日常的な子どもの接触という点では、親と子どもの接触や地域の大人と子どもの接触によっても、

一般の大人のもつ子ども観も、やはり、変化するといえる。また、幼稚園・保育所での親同士の交流、育児サークルや子育て支援の場で、同じ年頃の子どもを持つ親との交流を通して、一般の大人のもつ子ども観が変化することもあるだろう。子どもとの接触や大人同士の交流を通して、子ども観が変化するのは、教師・保育者も一般の大人も同じである。しかし、教師・保育者は子どもに関する専門的知識を持っているという点で、一般の大人とは、決定的に異なる。この専門的知識を持っているということが、子ども観の変容にどのような影響を持つのか。近年、育児に戸惑う親に対しての子育てに関する教育や児童虐待を行ってしまう親に対する教育について盛んに議論がなされているが、親に子どもに関する専門知を修得させること、つまり、子どもに関する専門知識を持っているということが、その価値観と行動にどのような影響を与えるかをみる上でも、本稿は一定の意義を持つといえるだろう。

II. 調査の概要

標本は、福岡県内において都市圏を構成している中核都市と周辺部を対象として、層化2段階抽出法によるサンプリングを行ない、調査の対象地・対象者を選定した。結果、1市2町（市部と郡部）の各選挙人名簿から合計2503人を抽出し、2003（平成15）年の7月から8月にかけて郵送調査を実施した。有効回収票は1349票、回収率は53.9%であった。なお、有効回収票のうち、教師・保育者は224人であった。

III. 調査結果の分析

(1) 子どものとらえ方

①子ども期の開始年齢と終了年齢

常日頃、子どもたちと関わっている教師・保育者では、子どものとらえ方に違いがあるのだろうか。まず、子ども期の開始年齢と終了年齢を見てみよう。人々は、子どもを何歳から何歳までと考えているのだろうか（表1-1）。子ども期の開始年齢を見ると、全体では、「1～3歳から」開始するとする者が最も多く（39.4%）、次いで「4～6歳から（29.4%）」ないし「誕生から（25.6%）」を開始するとする者が多い。教師・保育者であるかどうかでは、有意差は見られなかった。

一方、子ども期の終了年齢はどうだろうか（表1-2）。「10～12歳まで」で終了するとする者が最も多く（41.1%）、次いで「13～15歳まで」で終了するとする者が多い（31.9%）。義務教育段階の小学校ないし中学校卒業程度までを子どもだととらえているといえる。これについても、教師・保育者であるか否かで違いは見られなかった。

児童福祉法において、「児童」は満18歳に満たない者とされている。しかし、「子ども」には法律上の定

表1-1 子ども期の開始年齢 (%)

	生まれた時から	1~3歳から	4~6歳から	7歳以上	合計
教育・保育職	31.2	36.7	26.6	5.5	100.0(218)
非教育・保育職	24.2	40.1	30.1	5.6	100.0(863)
全体	25.6	39.4	29.4	5.6	100.0(1081)

(カッコ内は実数。無回答・不明は除く。教師・保育者を「教育・保育職」、教師・保育者ではない者を「非教育・保育職」と表記。以下同様。)

表1-2 子ども期の終了年齢 (%)

	9歳以下	10~12歳	13~15歳	16~18歳	19歳以上	合計
教育・保育職	3.7	36.9	29.7	21.5	8.2	100.0(219)
非教育・保育職	3.5	42.2	32.4	15.2	6.7	100.0(863)
全体	3.5	41.1	31.9	16.5	7.0	100.0(1082)

表1-3 子ども期が終わるのは (%)

	教育・保育職	非教育・保育職	全体
身体が大人と同じくらい大きくなった頃	0.9	1.7	1.6
身の回りのことを自分でできるようになった頃	5.4	5.4	5.4
自分で自分のことを主張することができるようになった頃	20.7	19.3	19.6
小学校の上級生になった頃	12.6	12.4	12.4
中学生になった頃	18.5	24.0	22.9
高校生になった頃	14.9	19.5	18.6
大学生になった頃	8.6	4.7	5.5
働いて自分で生活できるようになった頃	15.8	11.8	12.6
その他	0.9	0.7	0.7
わからない	1.8	0.6	0.8

義もない。「子ども」の定義は個々に任されており、専門知識の有無は関係ないのであろう。

②子ども期が終わるのは

では、その子ども期の終わりの基準はどこにあるのだろうか(表1-3)。多くの人が、子どもが中学生(22.9%)あるいは高校生(18.6%)になるのをきっかけとしたり、「自分のことを主張できるようになった頃(19.6%)」を契機に、子ども期は終わると考えている。また、教師・保育者に特徴的であるのは、大学生になった時あるいは就職を機に、子ども期が終わると考える傾向が見られたことである。実際、多くの子どもの様子を見ている教師・保育者では、大学生あるいは就職するまでは、子どもの内であり、教育の効果を重要視しているのだと思われる。

③理想の子ども像

次に、遊び方、勉強、遊びと勉強、親子関係、仲間と大人、礼儀、自己主張と協調性、公共性、能力といった9項目について、理想の子ども像を尋ねた(表1-4)。いずれの項目においても、教師・保育者であるかどうかでは違いが見られず、人々は、人に迷惑をかけないように社会のきまりを守り(96.6%)、自己主張ができ(93.8%)、大人の言うことをよく聞き(85.0%)、仲間とよく遊び(91.3%)、友達が分からなければ、勉強を教えてあげるような優しい子ども(88.3%)を理想としているといえる。教師・保育者で特別な理想の子ども像があるのではなく、多くの人が共通した理想の子ども像を抱いているといえる。

④子どもたちを育てていく方向性

子どもをどのように育てていくべきかについては

(表1-5)、全体的に「社会のきまりを守り人に迷惑をかけない公共心をもつ(75.2%)」、「自分でやりがいのある仕事をする(54.3%)」ように子どもを育てていくべきだとする者が多かった。また教師・保育者では、「自分の興味・関心に従って楽しく暮らす」べきだとするものが多く見られたが、非教育・保育職者では、社会のきまりや公共性の育成を選択する者が多かった。教師・保育者では、学校・地域社会のなかで、様々な知識や経験を得て、子どもが興味・関心を広げて、個々充実した生活を送ってもらいたいと思っているのであろう。

(2) 子どもたちの現状

①今の子どもたち

次に、今の子どもについて、それぞれをどのように見ているのだろうか(表2-1)。子どもの性格、意識、行動、関係、態度、表現の各側面について尋ねた。全体的に否定的な見方をしているが、教師・保育者ではない者では、「物怖じしないで行動する」、「衝動的な行動が多く、また目先の利害で行動する」、「他人のことに配慮しない」、「忍耐力がない、我慢ができない」、「口先ばかりで実行しない」といった見解を持つ者が多い。一方、教師・保育者では、「素直である」とやや肯定的に捉える傾向が見られた。ただし、教師・保育者であっても、言葉遣いが乱暴であるとは思っている。

教師・保育者では、一人ひとりの子どものと関わるなかで、テレビや新聞で流布されるような今の子どものイメージとは違った、子どもの性格・行動面の肯定的

表 1-4 理想の子ども像

(%)

①遊びについて	子どもだから、少しくらい危ない遊びをしても当然だ	子どもだから、危ない遊びをしてはいけない	合 計
教育・保育職	73.2	26.8	100.0(220)
非教育・保育職	70.3	29.7	100.0(864)
全 体	70.8	29.2	100.0(1084)
②勉強について	子どもは友だちに負けないようにしっかり勉強するべきだ	子どもだから、友だちが分からなければ、教えてあげるべきだ	合 計
教育・保育職	11.8	88.2	100.0(220)
非教育・保育職	11.6	88.4	100.0(868)
全 体	11.7	88.3	100.0(1088)
③遊びか勉強か	勉強よりも、仲間や友だちとよく遊ぶことの方が大事だ	遊びよりも、今のうちにしっかりと勉強しておくことの方が大事だ	合 計
教育・保育職	89.0	11.0	100.0(219)
非教育・保育職	91.9	8.1	100.0(865)
全 体	91.3	8.7	100.0(1084)
④親か自立か	子どもなのだから、親の言うことにしたがうべきだ	子どもなのだから、親の言うことよりも自分でしたいことをするのが当然だ	合 計
教育・保育職	74.1	25.9	100.0(216)
非教育・保育職	71.7	28.3	100.0(853)
全 体	72.2	27.8	100.0(1069)
⑤仲間か大人か	子どもなのだから、仲間の言うことよりも大人の言うことをよく聞くべきだ	子どもなのだから、大人の言うことよりも仲間の言うことを優先するのは当然だ	合 計
教育・保育職	84.5	15.5	100.0(213)
非教育・保育職	85.1	14.9	100.0(844)
全 体	85.0	15.0	100.0(1057)
⑥礼儀か活発か	子どもでも礼儀正しくするのが当然だ	子どもなのだから、少しくらいなら騒がしくても活発な方がよい	合 計
教育・保育職	62.1	37.9	100.0(219)
非教育・保育職	59.5	40.5	100.0(867)
全 体	60.0	40.0	100.0(1086)
⑦自己主張か協調性か	何かを決める時、みんなの意見に賛成するような子どもの方がよい	みんなの意見と違っていても、自分の意見をはっきり言える子どもの方がよい	合 計
教育・保育職	8.2	91.8	100.0(220)
非教育・保育職	5.7	94.3	100.0(872)
全 体	6.2	93.8	100.0(1092)
⑧公共性か自由か	子どもであっても、人に迷惑をかけないように社会のきまりを守るべきだ	子どもだから、あまり社会のきまりに縛られないで、自由に行動しても良い	合 計
教育・保育職	96.9	3.1	100.0(223)
非教育・保育職	96.6	3.4	100.0(871)
全 体	96.6	3.4	100.0(1094)
⑨特殊能力か万能か	子どものうちから、一つのことに優れている独創的な力を伸ばす方がよい	子どものうちは、一通り何でもできる力を身につけることの方が大切だ	合 計
教育・保育職	29.3	70.7	100.0(222)
非教育・保育職	27.8	72.2	100.0(869)
全 体	28.1	71.9	100.0(1091)

部分が見えてきたのであろう。

②子どもの成長・発達について

次に、子どもたちの性格、考え方、態度、行動、人間関係、服装、言葉遣いについて、どのように感じているか、望ましい方向に育っていると思うか回答してもらった(表2-2、表2-3)。全体的に、「子どもらしくないので、あまり好きではない」という傾向が強いのであるが、教師・保育者ほど、子どもの成長・発達の様相を好ましく思っている。彼・彼女らは、子どもの考え方、行動、人間関係、性格については、「子どもらしくて、好ましい」としており、統計的有

意差が見られた。教師・保育者ほど、子どもの否定的側面を認識しながらも、子どもに対して肯定的な感情を持っていたわけであるが、職務に携わるなかで、子どもに対する許容範囲が広がったのだと思われる。

また、子どもの成長・発達について、育っているかどうかということについては、さらに否定的な傾向が見られ、実際に、子どもの教育・保育に関わっている者であっても、「あまり望ましい方向に育っていないと思う」と答えている。

表1-5 子どもたちをどのように育てていくべきか (複数回答；%)

	教育・保育職	非教育・保育職	全 体	
社会や他の人々のために働く	8.0	9.9	9.5	
社会をよりよくしていくために活動する	23.2	17.8	18.9	
社会に役立つような、優れた能力をもつ	7.1	11.5	10.6	
社会のきまりを守り、人に迷惑をかけない公共心をもつ	66.5	77.4	75.2	***
自分でやりがいのある仕事をする	53.6	54.4	54.3	
社会の常識にとらわれないで、自由に行動する	3.6	2.8	3.0	
自分の興味・関心にしたがって、楽しく暮らす	13.8	8.3	9.4	**
頑張って仕事をして、人々の尊敬や高い評価を得る	7.6	6.8	7.0	

*** P<.001、** P<.01

表2-1 今の子どもについて(「はい」と回答した比率) (%)

	教育・保育職	非教育・保育職	全 体		
性格	忍耐力がない、我慢ができない	87.8	91.5	90.8	
	自己中心的である	85.7	85.6	85.6	
	親切で思いやりがある	35.3	29.9	31.0	
	素直である	47.9	40.8	42.3	*
意識	社会道徳や規範意識、モラルに欠けている	83.6	80.2	80.9	
	いろいろなことを知っていて知識は豊富だ	77.9	79.4	79.1	
	何を考えているのか分からない	77.3	79.7	79.2	
	興味・関心が広い	67.1	64.8	65.2	
行動	口先ばかりで実行しない	63.3	69.3	68.0	
	物怖じしないで行動する	69.1	77.6	75.9	**
	衝動的な行動が多く、また目先の利害で行動する	81.7	87.3	86.1	*
	好きなことには積極的に取り組む	89.6	92.4	91.9	
関係	誰に対しても親切だ	18.1	15.1	15.7	
	友だちとの付き合い方が上手だ	34.1	37.7	37.0	
	他人のことを配慮しない	70.2	76.1	75.0	
	仲間意識が薄く、連帯感がない	64.7	63.8	64.0	
態度	自分の気持ちを他人にうまく伝えられない	78.0	78.0	78.0	
	基本的なマナーができていないし、生活態度も悪い	79.9	79.6	79.6	
	礼儀正しい	18.7	19.2	19.1	
	何事にも協力的だ	18.2	15.6	16.1	
表現	言葉遣いが乱暴だ	81.9	76.3	77.5	
	服装が子どもらしくない	59.7	63.2	62.5	

** P<.01、* P<.05

表2-2 子どもの成長・発達について(「子どもらしくて、好ましい」と回答した比率) (%)

	教育・保育職	非教育・保育職	全 体	
近頃の子どもの性格について	39.1	31.6	33.1	*
近頃の子どもの考え方について	36.7	26.4	28.5	**
近頃の子どもの態度について	31.8	26.3	27.5	
近頃の子どもの行動について	34.9	25.1	27.1	**
近頃の子どもの人間関係について	37.3	29.3	30.9	*
近頃の子どもの服装について	37.1	32.4	33.3	
近頃の子どもの言葉遣いについて	21.6	19.8	20.2	

** P<.01、* P<.05

(3) 子どもの成長・発達をめぐる問題

では、なぜ子どもの成長・発達について好ましく感じられず、育っていないと思うのだろうか。子どもの成長・発達において、何が問題となっているのだろうか(表3-1、表3-2)。大半の人は、子どもの成長・発達における家庭環境の影響(81.1%)の大きさを指摘している。学校生活を挙げる者は少ない(44.2%)。そして、今日の家環境、友人・仲間関係、学校生活、地域社会、社会的環境についての問題点を

尋ねたところ、社会全般の規範意識が低下していること、心の豊かさや思いやりの心が失われていること、親が子どもに干渉しすぎたり、甘やかしすぎることなどを問題にしている。また、教師・保育者ではない者ほど、「学校の授業が進学中心の勉強になっている」、「子どもに対する学校の指導が毅然としていない」、「学校の先生と子ども達の関係が薄れている」などと学校生活の指導の問題を挙げていたり、「社会の規範意識が低下している」、「心の豊かさや思いやりの心

表2-3 子どもの成長・発達について（「望ましい方向に育っていると思う」と回答した比率）（%）

	教育・保育職	非教育・保育職	全体
近頃の子どもの性格について	20.5	18.8	19.1
近頃の子どもの考え方について	20.6	17.7	18.3
近頃の子どもの態度について	16.1	12.5	13.2
近頃の子どもの行動について	17.0	13.2	14.0
近頃の子どもの人間関係について	20.7	15.5	16.6
近頃の子どもの服装について	29.0	26.5	27.0
近頃の子どもの言葉遣いについて	11.5	12.8	12.6

表3-1 子どもの成長・発達に影響を及ぼすもの（%）

	教育・保育職	非教育・保育職	全体
子ども本人の性格や資質	16.1	20.0	19.2
家庭環境	83.9	80.3	81.1
友人や仲間	39.3	45.5	44.2
学校生活	9.4	11.1	10.8
地域社会の環境	21.9	17.5	18.4
社会の風潮や政治等の社会環境	21.0	18.8	19.2

表3-2 子どもの成長・発達における問題点（「はい」と回答した比率）（%）

	教育・保育職	非教育・保育職	全体	
親と子どもの会話やコミュニケーションが少ない	83.9	85.3	85.1	
親が自己中心的である	79.0	80.7	80.3	
親が子どもに干渉しすぎたり、親が子どもを甘やかしすぎる	90.8	94.3	93.6	*
子どもたちの遊び場が少ない	79.5	76.7	77.3	
子どもの数が少なくなったために、家の近所に子どもたちがいなくなった	87.3	87.5	87.5	
学校の先生と子どもたちの関係が薄れている	71.0	79.0	77.4	*
子どもに対する学校の指導が毅然としていない	67.5	78.1	75.9	**
学校の授業が進学中心の勉強になっている	73.4	84.4	82.1	***
地域での活動や行事に無関心な大人が多い	83.3	86.3	85.7	
地域で子どもたちが遊んだり、スポーツをしたりする場や機会が少ない	75.2	76.5	76.2	
地域の大人の人たちが子どもに無関心になっている	77.09	79.1	78.6	
社会全般の規範意識が低下している	92.6	96.6	95.8	**
社会全般に心の豊かさや思いやりの心が失われている	93.2	96.3	95.6	*
テレビや漫画などから、子どもたちが悪い影響を受けている	84.0	86.9	86.3	

*** P<.001、** P<.01、* P<.05

が失われている」と社会環境の低下を問題として挙げている。

(4) 子どもに対する働きかけ

子どもに対する行動ではどうだろうか。教師・保育者が、職場を離れ、地域での生活において、子どもとどのように関わっているのだろうか。まず、地域における人間関係について見てみよう（表4-1）。挨拶をする人、立ち話をする人、頼みごとをする人がいるかどうかを尋ねた。「挨拶をする人がいる」は相互性のレベルが低く、「頼みごとをする人がいる」になると、相互性のレベルが高いわけである。全体としては、「いる」と回答したのは、挨拶をする人（68.3%）、立ち話をする人（57.9%）、頼みごとをする人（50.7%）である。また教師・保育者ほど、挨拶をする人が「いる」とする者が多かった。地域の子どもの会話頻度

でも（表4-2）、教師・保育者ほど、子どもと話す機会が多かった（61.7%）。しかし、子どもが危険な遊びをした場合の対応の仕方（表4-3）では違いは見られなかった。多くの大人が、「注意をする」（72.7%）のであり、「放っておく（18.9%）」、「知らせる（8.4%）」は少なくなっていた。

では、地域の子どもの育成団体活動あるいは子ども行事への参加ではどうだろうか（表4-4、表4-5、表4-6）。子ども会、スポーツ集団、子どものサークル等への加入は、全体的に加入度が低く、子ども行事への参加希望も約3割程度である。教師・保育者とそれ以外の者では、教師・保育者の加入度は多くなっている。しかし、実際に参加しているかどうかでは違いは見られなかった。また、子ども行事への参加希望は、教師・保育者であればあるほど高くなっていた。

表 4-1 地域における人間関係 (%)

	挨拶をする人		立ち話をする人		頼みごとをする人		合 計
	いる	いない	いる	いない	いる	いない	
教育・保育職	74.6	25.4	58.0	42.0	52.2	47.8	100.0(224)
非教育・保育職	66.7	33.3	57.9	42.1	50.3	49.7	100.0(881)
全 体	68.3	31.7	57.9	42.1	50.7	49.3	100.0(1105)

P<.05

表 4-2 地域の子どもの会話頻度 (%)

	高い	低い	合 計
教育・保育職	61.7	38.3	100.0(222)
非教育・保育職	47.0	53.0	100.0(876)
全 体	50.0	50.0	100.0(1098)

P<.001

表 4-3 子どもたちが危険な遊びをした場合の対応 (%)

	注意する	放っておく	知らせる	合 計
教育・保育職	72.9	19.0	8.1	100.0(221)
非教育・保育職	72.7	18.9	8.4	100.0(868)
全 体	72.7	18.9	8.4	100.0(1089)

表 4-4 子どもの育成団体等への加入度 (%)

	加入している	加入していない	合 計
教育・保育職	33.0	67.0	100.0(224)
非教育・保育職	19.9	80.1	100.0(881)
全 体	22.5	77.5	100.0(1105)

P<.001

表 4-5 子どもの育成団体等への参加度 (%)

	高い	低い	合 計
教育・保育職	52.1	47.9	100.0(73)
非教育・保育職	46.6	53.4	100.0(176)
全 体	48.2	51.8	100.0(249)

表 4-6 子どもの行事への参加希望 (%)

	高い	低い	合 計
教育・保育職	36.7	63.3	100.0(221)
非教育・保育職	29.9	70.1	100.0(870)
全 体	31.3	68.7	100.0(1091)

P<.05

教師・保育者では、地域においても、子どもへの働きかけが積極的であり、子どもの育成団体活動あるいは子ども行事への参加も高くなっていった。子どもの社会化は、家庭・学校・地域社会の三つの場が必要であるが、地域社会における社会化の重要性を知っているがために、地域においても、教師・保育者は、子ども達に積極的に働きかけているのではないだろうか。あるいは、子どもに対して好ましい感情を持っているからこそ、積極的働きかけにつながっているのかもしれない。

(5) 自由記述の回答から

教師・保育者のもつ子ども観をさらに詳しく見ていくために、自由記述の回答の分析を行いたい。ここでは、教師・保育者のもつ子ども観と一般の大人の子どもの観との違いが出た項目を中心に自由記述の回答をみていく。なお、ここで分析を行う回答は、「近頃の子どものこと、また昔の子どものことについて

何か感じていることがありましたら、どのようなことでも結構ですから、ぜひお聞かせください。」という質問文に対して寄せられた回答であり、224名の教師・保育者のうち、49名（男性10名、女性39名）から回答が得られた。

まず、はじめに教師・保育者は、子どもをどのように捉えているのか、また、子どものどのような点に問題を感じているのだろうか。

＜今の子どもの問題点＞

- ①今の子どもたちを見て感じたことを書いてみたいと思います。第一に人の話を聴かずに、相手の目を見て話すことができなくて、精神的に不安定な子どもが多く、おやつにしても好き・きらいを言っはわがままで食べ物を粗末に扱う。自分のものでも大切にしない。…中略…遊びの中でもすぐに飽きる、そしてあきらめる。気に入らないときは「むかつく」と口癖に言っ

たり、相手を伺ってすぐに手を出す。人の嫌がること。いたずらをする。(50~54歳 女性)

- ②近頃の子も達は常識がない。自分のことだけを考えて、周りの人のことを考えきれない。(25~29歳 女性)

〈「子どもは変わらない」〉

- ③近頃の子もたちに限らず、以前から子どもというものは自己中心的で我がまま、衝動的かつ未熟、それでいて明るく、素直で可愛らしく…とさまざまな面を持ち合わせていたのだと思います。(35~39歳 女性)
- ④「子どもは怪物」という言葉を聞いたことがあります。本来子どもとはわがままで自己中心的で残酷であり、その「怪物」を相手にするには一家全員であらなければとても太刀打ちできない。(35~39歳 女性)
- ⑤子どもの本質自体は今も昔もかわらないのではないかと考えます。(25~29歳 女性)
- ⑥近頃の子もはどのようなこのとマスコミ関係や親が言うことが多いけれど、昔とそれ程変わってはいない。私は昭和10年代後半の生まれだけれども、我々の子どもの頃も今の子どもはどのようなこのは大いにありました。これはいつの世代でも変わることはないでしょう。しかし、今は我々の子どもの頃とは社会的・経済的には相当の開きがあります。だからといって、考え方・行動というものは大差ありません。(55~59歳 男性)

①、②のように、具体的に子どもの問題点を記述した発言は少なく、それよりも③~⑥のように、子どもそのものは変わらないのではないかという記述の方が多くみられた。子どもの本質が変わらないのであれば、何が変わったのだろうか。その原因をどのような点に求めているのだろうか。

〈子どもたちの生活の変化(忙しさ)〉

- ⑦週5日制導入は反対です。子どもたちに「ゆとり」を持たせる為だといわれていますが、実際のところどうでしょうか？休みが増えた分、塾や習い事を親に強制させられ、縛り付けられている子どもをよく見ます。(30~34歳 女性)
- ⑧核家族で育った私たち世代の間に生まれてきた子ども達は少子化で一人っ子も多く、親の過剰な期待でいろいろとやらされている操り人形になっている子どもたち。その中で子どもは子どもなりにとてもがんばっている健気な姿も見えます。(30~34歳 女性)
- ⑨近頃の子も達は幼稚園くらいのときからお受験とかで勉強が始まり、小学校に上がると学校が終わってから、また塾に通ったりしていることが多いので、忙しいと思う。…中略…今の

子どもたちがすぐにキレるとかこわい(少年犯罪を起こす)存在に感じられるようになったのは、今の大人がそういう子どもに育ててしまったのではないだろうか。(25~29歳 女性)

〈親の変化〉

- ⑩「近頃の子も達は」といわれがちですが、子どもは昔も今も変わりません。今、問題なのは親だと思っています。しっかりしていない親に育てられているから社会問題になるような子どもたちが増えたのだと思っています。(55~59歳 女性)
- ⑪近頃の親の姿を見ていますと、親が親になりきっていないため、家庭内でのしつけもできず、学校・社会にお願いする。家庭内でのしつけもできず、学校・社会にお願いする。何かあれば、自己中心的な強い自己主張はする。集団活動には参加せず、気心の知れた小グループでの楽しみは参加する。(55~59歳 女性)
- ⑫今の子も、昔の子も根本的には一緒だと思いますが、今の子たちの方が、塾や習い事等で忙しく、親の仕事の関係などで一緒に過ごす時間も少なく、寂しいのではないかと思います。大人がもう少し、子どもたちを怖がることなく注意したり、関心をもって接したりする世の中になれば、子どもたちも変わってくるのではないかと思います。(40~44歳 女性)
- ⑬今の子もたち…というよりもそれを育てる親の方に目が行きます。…中略…結局、親が短気、言葉使いが変などそのまま子どもに移っているので生徒たちを見ても素直で明るい子もいれば、乱暴で挨拶もしない子もいる。それはやはり、昔も今も、大人、社会、TVを含め環境が影響していると思う。(25~29歳 女性)
- ⑭最近の子もはわがままで自分本位の考え方である。これもやはり親の子育ての姿がそのまま引き継がれている。…中略…子どもには責任は全くありません。(60~64歳 男性)

〈学校教育の変化〉

- ⑮昔は先生は怖いというイメージだったが、今はやさしいとか怖くないとかいう。昔の学校教育のほうが良かったと思う。子どもはある程度、きびしくしつけたほうが良いと思う。(35~39歳 女性)

〈遊びの変化〉

- ⑯社会の変化に伴い、子ども達の遊びがとても変わってきたように思います。ひと昔前には、小学生だけでカラオケに行ったり、お金を使うことはほとんどなかったけど、今は友達と遊ぶのに、とってお金がかかるようです。それに友達と遊んでいる最中にメールをす

る。昔も、その当時はやった物を持っていないと、話に遊びに入れないということはあったけど、何かが違うような気がします。「塾通いで遊ぶ友達がいない」「思いっきり遊ぶ場所がない」等、子どもを取り巻く環境も、ストレスを思いっきり発散させることが出来ないものになってきていると感じます。今の社会では、子どもにとって、『子どもらしく』というのには、無理があるのでは？ (30~34歳 女性)

〈情報環境の影響〉

- ⑰テレビゲームをはじめあまりにも、ゲームがあふれ、子どもたちの心に悪影響を与えていると思う。ビデオの普及でくり返しテレビを見るようになり、あまり物事を考えなくなったと思う。(50~54歳 女性)
- ⑱地域で協力・思いやり・助け合い・報恩等の心を育てた。今は薄らいでいる。…中略…現代の子どもを取り巻く環境は、子どもに見せたくない雑誌等多すぎる。子どもに見せたくないテレビの内容あり。(70歳以上 男性)
- ⑲子どもは珍しいものや不思議な物にひかれ、何かをやってみようとする姿は昔となら変わらないと思います。変わったのは子どもを取り巻く情報の量であると思います。それは、社会の変化から来るものかもしれませんが、子どもは安易に手に入る情報の渦の中において対処しきれない状態にあると思います。(40~44歳 男性)

〈社会全体の変化〉

- ⑳子どもが子どもだけで変わったのではなく、周りの大人や社会、世の中の仕組みが、おかしくなっていて、子どもを育てることの力をなくした結果が、子どもの育ちを未熟なものにしているように思います。(35~39歳 女性)
- ㉑豊かさや平和が満ちたこの時代に、食べ物の大切さ、命の大切さ、物や時間の大切さを子どもたちに教えることはきわめて難しいと思います。スイッチひとつで何でもできる時代です。「苦勞」とか「技術」とかに価値を見出せない、「人のお世話になる」、「人に迷惑をかける」などの経験が生まれながらに少ないのが今の子どもたちではないでしょうか。(35~39歳 女性)

〈その他〉

- ㉒育てられ方によって人間は世のため、人のために働くという人間の本分を全うできるし、育てられ方によっては他の動物にも劣る。最近の青少年犯罪を見ていると、特にそう思われる。だからこそ、正しい教育、人間の本分を教える躰、良い環境が不可欠と思う。(55~59歳 男性)

- ㉓昔の子どもは近くの者だけで団体で遊んで、その中で分別ができ、親が言わなくとも、素直に育っていったと思う。今の子どもは例の「かぎっ子」の人たちが中心で、自分がしつけをもらっていないので、子どもの成長に合わせた生き方・育て方がわからないのではと思います。(55~59歳 男性)
- ㉔子どもを見る周りの目が正しい見方ができているかが疑問です。邪心のない目で相手をみた時に行為においては善悪判断があるかもしれないが、人間の本質自体がすばらしいところがあるはず。それを見抜けない人も多くいるはず。(40~44歳 女性)

子どもたちの変化の原因として、教師・保育者が捉えている内容をまとめると、①週5日制の導入や塾通い・お稽古事のために子どもの生活が忙しくなったこと、②大人になりきれていない親が子育てを行うために子どものしつけや教育ができていないこと、③加えて、学校でもまた教師が子どもを教育できていないこと。さらに、④子どもの遊びが変化したことや⑤マスメディアをはじめとする情報環境の変化、⑥社会全体が変化したこと。このように、子どもの成長・発達に必要な環境が保障できない状況に陥ったことが、「子どもの変化をもたらした」と考えられているようである。

以上のことから、教師・保育者は、子どもの現代的な問題について、子どもの本質自体は変わらないが、それを取り巻く環境が変化したため、問題が生じているのだと考えているようである。

IV. まとめ

本稿では、教師・保育者のもつ子ども観を一般の大人の子どもの観との比較によって明らかにしてきた。

分析の結果は、以下のように要約することができる。

《統計的分析の結果から》

(1) 【子どものとらえ方】

子ども期の開始年齢では、「1~3歳から」開始とする者が多く、子ども期の終了年齢では「10~12歳まで」で終了とする者がそれぞれ約4割を占め、教師・保育者であるか否かでの違いは見られない。子ども期が終わる契機については、教師・保育者ほど、大学生・就職を機に子ども期が終わると考える傾向が見られた。理想の子ども像は、社会の決まりを守り、自己主張ができ、大人の言うことを聞き、仲間とよく遊ぶような子どもであり、教師・保育者であるか否かでの違いはない。また、子どもを育てていく方向性については、他人に迷惑をかけない公共性を持ちつつ、自分でやりがいのある仕事

をすべきだとしているが、教師・保育者ほど、自分の興味関心に従って楽しく暮らすように子どもを育てていくべきだとしている。

(2) 【子どもたちの現状】

今の子どもに対しては、全体的に否定的見方がなされるが、教師・保育者では、やや肯定的な見方を示す。また、子どもの成長・発達については、好ましく感じられず、あまり望ましい方向に育っていないとしている。ただし、一般の大人に比較すると、教師・保育者では、子どもの成長・発達について肯定的な感情を抱いていた。

(3) 【子ども成長・発達をめぐる問題】

約8割が家庭環境の影響の大きさを指摘している。教師・保育者ではない者ほど、学校の授業が進学中心になっていることや、学校の指導が毅然としていないなど学校生活の指導や社会環境の低下を問題視していた。

(4) 【子どもに対する働きかけ】

教師・保育者ほど、地域の子どもの会話頻度は高く、子ども会、スポーツ集団、子どものサークル等の地域の子どもの育成団体活動に加入しており、子ども行事への参加希望も高くなっている。

《自由記述の回答から》

教師・保育者では、今も昔も子どもの本質は変わっていないとする。むしろ子どもの生活が忙しくなったこと、親になりきれない親のせいで、子どものしつけや教育ができないなどの親の変化、教師の変化、遊びの様相の変化、マスメディア等の影響、社会全体の変化を問題に挙げ、このことが、子どもに変化を与えていると捉えている。

最後に、本稿で明らかにした教育・保育職者の子ども観から、専門的知識を持つことについて、述べていくことにする。

教育・保育者養成課程の学生は、「子どもが好きだ

から、可愛いから」という理由で、教師・保育者を志望する者が多い。しかしながら、専門的知識・技能の習得や実習経験を通して、子育てというものは、好き、可愛いだけでは務まらない大変な仕事であるということ、そして、子どもは幼くとも、周囲の物的・人的環境からの影響を受けて、育っていく存在であると実感していく。本稿の対象となった教師・保育者の多くが、地域の中でも、子どもへの働きかけが積極的であったわけであるが、まさに、人的環境としての大人の役割を果たしているといえるのではないだろうか。このことから、子育ての当事者である親に対する教育のみならず、子育て世代を取り巻く人々にも、子どもに関して学ぶ機会を与えることは、子どもに対する見方を形成する機会となる。その結果、子どもとの相互作用のあり方に変化をもたらし、ひいては、子どもの行動・発達に必要な人的・物的環境の形成につながっていくと思われる。

【付 記】

本稿で使用した資料は、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「現代日本の『子ども観』に関する実証的研究」(代表：住田正樹)の調査の一部である。

参考文献

- 柏木恵子2001『子どもという価値』中公新書
 岡野雅子2003「子どもに対するイメージ」『信州大学教育学部紀要』110、57-67頁
 柴野晶山1989「教師の子ども観・教育観」柴野昌山(編)『しつけの社会学』(世界思想社)67-86頁
 住田正樹2004『現代日本の「子ども観」に関する実証的研究』(平成13年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書)
 住田正樹2006「現代日本の子ども観」住田正樹・多賀太(編)『子どもへの現代的視点』(北樹出版)12-38頁

(2008年11月10日受理)